The Dharmadhâtuvâgiśvaramandala in Tham Bahi Temple in Kathmandu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001065

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

名古屋大学古川総合研究資料館報告
Bull. Nagoya Univ. Furukawa Museum
№8, 47－52, 1992

カトマンドゥ市タン・バヒー寺の法界語自在マンダラ

The Dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala in Tham Bahī Temple in Kathmandu

森　雅秀（Masahide MORI）

名古屋大学印度哲学史研究室
Department of the History of Indian Philosophy, School of Letters.
Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464－01 Japan

名古屋大学古川総合研究資料館報告
Bull. Nagoya Univ. Furukawa Museum
№8, 47－52, 1992

カトマンドゥ市タン・バヒー寺の法界語自在マンダラ

The Dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala in Tham Bahī Temple in Kathmandu

森　雅秀 (Masahide MORI)

名古屋大学印度哲学史研究室
Department of the History of Indian Philosophy, School of Letters.
Nagoya University, Chikusa-ku, Nagoya 464－01 Japan

Abstract

The Dharmadhatuvāgīśvaramaṇḍala is one of the most important maṇḍalas in the history of Tantric Buddhism. This maṇḍala achieved a popularity among Nepalese Buddhists in the Kathmandu Valley. Tham Bahi Temple in Kathmandu City preserves one example of this maṇḍala depicted on a copper plate. This article gives a brief description and a photographic presentation of this work.

ネパールの首都カトマンドゥ市北部に位置するタメル地区にタン・バヒー寺 (Tham Bahī) という仏教寺院がある。この寺院は「バガヴァーン・バーハー」(Bhagavān Bāhā)、「ダルマダートゥ・マハーヴィハーラ」(Dharmadhātu Mahāvihāra) ともよばれ、さらにインド密教の中心的寺院の名からとられた「ヴィクラマシーラ・マハーヴィハーラ」(Vikramaśīla Mahāvihāra) の名でも知られている。タン・バヒー寺はカトマンドゥ市内の仏教寺院の中でももっとも古い寺院のひとつで、「タメル」という地区の名称もこの寺院に由来している。タン・バヒー寺の歴史や機構などはカトマンドゥ在住の J. K. Locke に詳しい報告がある (1985 : 404－413)。彼によれば、11世紀のアティーシャ (Atīśa)、13世紀のヴィブーティチャンドラ (Vibhūticandra) やダルマスヴァーミン (Dharmasvāmin) らがこの寺院に関係したことが、チベットの資料に残されている。またネワール族 (Newar) でありながら仏教徒ではない「プラダーン」(Pradhān) とよばれる一族によって、この寺院が維持されてきたが、これはカトマンドゥの仏教寺院としては特異な例であること

1992年　9月30日受付
1992年10月　9日受理

を指摘している（Pruscha 1975：13も参照）。

タン・バヒー寺は二層の建物が中庭を廻廊のようにロの字型に取り囲む、カトマンドゥの仏教寺院の典型的なスタイルをとる。この形式はバヒ（bahi）とよばれ、寺院名の一部にもなっている。東側の道路に面した入口から中庭に入ると、正面にあたる西側に四層の本堂がそびえる（図1）。本堂は周囲の建物の一部を形成しているが、他の部分よりも二階層高く、中庭に張り出した格好となっている。本堂の前の中庭には数基のチャイトヤ（仏塔）、鐘、観音やマハーカーラなどの彫像がおかれている。

タン・バヒー寺は東側の入口の他にも南東の隅に小さな出入口がある。ここから中庭に入ったところにマンダラ台がおかれている（図2）。このマンダラ台はこれまで研究者によって紹介されることがなかったが、表面には法界語自在マンダラ（Dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala）が描かれている（図3）。

法界語自在マンダラは文殊（Mañjughoṣa）を中尊とする大規模なマンダラである（長野・立川　1989)。マンダラに含まれる尊格の数は二百尊以上にものぼり、第一重から第四重の四重の構造の中に整然と並べられている。時代的にはヨーガ・タントラから無上ヨーガ・タントラの過渡期に位置し、金剛界マンダラ(Vajradhātumaṇḍala）と秘密集会マンダラ（Guhyasamājamaṇḍala）の両者の影響を濃厚に示す。これに加えて、大乗仏教の基本的概念を尊格化したものや、ヒンドゥー教の神がみが多数含まれ、規模の拡大がはかられている。現在の法界語自在マンダラは、11世紀初頭のインドの学僧マンジュシュリーキールティ（Mañjuśrīkīrti）によるマンダラ儀軌書（西蔵大蔵経影印北京版、第3416番）の記述にほぼ合致している。そして、直接この文献の流れを汲むものと、12世紀に同書などを参照してアバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta）が著した『完成せるヨーガの環』（*Niṣpannayogāvalī*）にもとづくもののふたつの系統がある（森　1989：236－237)。

法界語自在マンダラがインドで制作されたことは、これらの文献の流布からみても明らかであるが、土壇マンダラを主流とするインドにはマンダラの作例は現存しない。現在、われわれが見ることのできる法界語自在マンダラは、チベットとネパールにおける遺品である。チベット仏教圏の法界語自在マンダラとしては、ラダック地方のものが比較的はやくから紹介されてきた。アルチ寺やチャチャプリ寺のものが儀軌に忠実な尤品として知られる（岩宮他　1987：65－77)。

作タントラから無上ヨーガ・タントラにいたる仏教タントリズムのほとんどすべてのマンダラを受け継いだチベットとはことなり、カトマンドゥ盆地のネワール族を中心とするネパール仏教の場合、流行したマンダラは金剛界マンダラや悪趣清浄マンダラ（Durgatipariśodhanamaṇḍala）などの限られた種類のものであった。そして、法界語自在マンダラもカトマンドゥのネパール仏教徒たちに特に人気のあったマンダラのひとつなのである（立川　1987：164－170)。

ネパールの仏教徒たちは法界語自在マンダラについての図像的な情報をサンスクリット文献か

ら得ていた。その中でも、サンスクリット写本の現存状況から判断して、『完成せるヨーガの環』（Bhattacharyya 1972；森　1989）がかなりの権威を持っていたと考えられる。また同書と類似の内容を含む『阿闍梨所作集』（*Ācāryakriyāsamuccaya*）も利用されていた。これらの二文献には二十数種のマンダラに関する図像的な情報が含まれているが、このうち法界語自在マンダラの章のみを取り出して、単独の文献とすることもあった。18世紀のイギリスの外交官で、ネパールにおける仏教写本の発掘と収集に功績のあったB. H. Hodgsonは、ロンドンのインド省図書室（India Office Library and Records現在は大英図書館の改組にともなってOriental and India Office Collectionsと改称されている）に多数の文献を残している。このコレクションの中に「法界マンダラ」の名称をもつサンスクリット文献が含まれるが(Bendall 1902：No. 7747)、これは『阿闍梨所作集』から法界マンダラの章のみを取り出し、これに手を加えた文献と考えられる。

カトマンドゥ盆地の場合、マンダラは寺院の境内や中庭におかれたマンダラ台において見ることができる（立川　1987：32)。カトマンドゥ盆地のマンダラ台については、すでに立川氏による詳細な報告がある（1989)。立川氏はハカー・バハール、ブ・バハール、クマーリ・チョークそしてスヴァヤンブー・ナートの各寺院にあるマンダラ台を紹介している。このうち、ハカー・バハールとスヴァヤンブー・ナートの法界語自在マンダラでは、マンダラに含まれるすべての尊が、細部の特徴に至るまで詳しく描かれている。また各尊の尊容は描かずに、かわって円や楕円でその位置を示したマンダラ台もハカー・バハールにはおかれている。このように、各尊を描かずに蓮華や楼閣などのマンダラの「容器」のみを描いたマンダラはカトマンドゥでしばしば見られるものである。

カトマンドゥではマンダラはマンダラ台のほかに絵画においても表現されてきた。彩色をほどこさず、線画のみの白描図像の遺品も数多く残されている。先述のHodgsonのコレクションにも白描のマンダラがおさめられているが（Bendall 1902：No. 7750)、この中には二種類の「法界マンダラ」（Dharmadhātumaṇḍala）が含まれている（図29、30右上)。ここでも尊格は描かれず、マンダラの「容器」のみが表現されている。白描の伝統はネパール仏教の絵師たちによって現在でもなお受け継がれている（Tachikawa 1991)。

タン・バヒー寺の法界語自在マンダラは、カトマンドゥ盆地のマンダラ台の中でも比較的新しい時代のもので、おそらく今世紀の制作と考えられる。高さ約80cm、一辺約90cmの基台の上におかれ、盗難を避けるため鉄の柵によってまわりを囲まれている（図２)。マンダラにも鉄製の格子がつけられ、上部の蓋の部分が開閉できるようになっている。蓋は施錠が可能で、その内側には中央に巨大な金剛杵が固定されている。鉄の柵のない基台の東側の側面には、銘文の彫られた二枚の石板がはめ込まれている（図28)。マンダラの表面は鳩の糞や供物の花、色粉などが散乱しているが、破損等はなく保存状況はきわめて良好である。

マンダラは二種類の方法で表現されている。中尊の文殊、八仏頂、四明妃からなる第一重はブロンズの浮彫で（図４）、第二重から外側の残りの部分は銅板への陰刻である（図11～27)。第一重はさらに中尊（図５）と八仏頂（図６）、そして四仏の地の部分（図７、８）には金メッキがほどこされている。また第二重以降では各尊の背景に小さなくぼみをつけて、立体感を生み出そうとしている（図19など)。スヴァヤンブー・ナートの法界語自在マンダラの作例などと比較すると、いささか稚拙さも感じられるが、各尊の細部まで詳しく表現され精緻な仕上がりとなっている。浮彫の第一重と陰刻の第二重以降では印象が若干ことなり、前者は精巧さを、後者は力強さを感じさせる。

各尊の特徴や文献との詳細な比較は別の機会にゆずるが、表現上の特徴やこの作品に固有な点などをいくつか指摘しておく。

第一に、構成する尊格について。第一重において四仏のまわりに配されるはずの金剛薩埵をはじめとする十六大菩薩がここでは表現されていない。また第四重の外側を守る金剛摂らの四尊の門護も含まれない。第四重の神がみ（図25、26）の配列が文献の記述に一致しないことも指摘しておく必要がある。

第二に、中尊と四仏が獣座ではなく蓮華座となっている（図４)。文献では文殊は獅子、阿閦は象などそれぞれがことなる動物の背に乗るという記述がある。一方、第二重以降の尊格は蓮華座に乗ることが文献に規定されているが、ここでは座は省略されている。

第三に、楼閣の表現方法について。第一重の四仏と四明妃を区切る帯（楼閣の柱に相当する）に、四つの部族のシンボルである金剛杵、宝、蓮華、二重金剛杵が小さく表現されている（図７～10)。これはチベットの法界語自在マンダラの作例ではみられないものであるが、文献上には言及があり（*Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā*, 西蔵大蔵経北京版、第3962番、99.3.4)、砂マンダラにも類似の表現がある。また、楼閣の外壁が単純な構造で幅が狭いため、必然的に門の部分が小さくなっている。そのため、門護が他の尊格に比べると著しく小さく表現されたり（図12､14の各中段)、本来的には門に位置するはずの尊がトーラナの部分にはみ出すことになる（図11､13の各上段)。

第四に楼閣の装飾として、第一重の四明妃の上部左右に、楼閣の装飾品である瓔珞半瓔珞や宝などが描かれている（図９、10)。トーラナの横におかれる満瓶や如意宝などはマンダラに一般にみられるものであるが、髑髏を連ねたカトヴァーンガは法界語自在マンダラとしては珍しい（図27)。

この他にも第二重以降の各尊の光背が縦長の三葉龕であることや（図19～24)、尊格と尊格の隙間を蓮華の文様で埋める点（図15、24など)、マンダラの外周の火炎輪が波状の独特の形態をとること（図26上部）などを指摘することができる。

以上あげてきた特徴のいくつかは、チベットや日本のマンダラにはみられない点であり、この作例がネパールのマンダラのひとつの様式を示しているといってよいであろう。制作年代が比較的新しい

ことから、文化財的な価値はそれほど高くはないかも知れないが、ネパール仏教独自のマンダラの作例として注目すべき作品とみなすことができる。

付記

本稿は1990年12月に行なったカトマンドゥ盆地のネパール仏教に関する現地調査の成果の一部である。調査に当たっては庭野平和財団より平成2年度の研究助成を受けた（課題番号 90－R－025)。本稿で使用した写真はいずれもこの時の筆者自身の撮影による（撮影日は1990年12月18日)。ただし図28のみは名古屋大学大学院生五十嵐弘暁氏から提供いただいた（1992年7月17日撮影)。また図29、30は大英図書館インド省図書室が所蔵するマンダラ白描図である。掲載・発表にあたってこれらの各位に謝意を表します。

引用文献

Bendall C. (1902): *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the British Museum.* London.

Bhattacharyya, B. (1972): *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta* G. O. S. No. 109. Baroda, Oriental Institute (repr.).

岩宮武二（写真)、石黒　淳・頼富本宏（解説）(1987): ラダック曼荼羅. 岩波書店.

Gutschow, N. *et al*(1987): *Newar Towns and Buildings:An Illustrated Dictionary Newar－English.* Sankt Augustin, VGH Wissenschagtsverlag.

Locke, J. K. (1985): *Buddhist Monasteries of Nepal.* Kathmandu, Sahayogi Press.

森　雅秀（1989)：『完成せるヨーガの環』(*Niṣpannayogāvalī*) 第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト. 長野泰彦・立川武蔵編『法界マンダラの神々』国立民族学博物館研究報告別冊 7, 235－282.

長野泰彦・立川武蔵編（1989)：法界マンダラの神々（国立民族学博物館研究報告　別冊　7号). 国立民族学博物館.

Pruscha, C. (1975): *Kathmandu Valley : The Preservation of Physical Environment and Cultural Heritage, A Protective Inventory*, 2 vols.. Vienna.

立川武蔵（1987)：曼荼羅の神々. ありな書房.

立川武蔵（1989)：カトマンドゥにおける法界マンダラ. 長野泰彦・立川武蔵編『法界マンダラの神々』国立民族学博物館研究報告別冊　7, 5－44.

Tachikawa, M. (1991) : A Study of the *Vajradhātu－maṇḍala* (1): Modern Line－drawings Depicted According to the *Niṣpannayogāvalī*. *Bulletin of the National Museum of Ethnology*, 15 (4), 1073－1120.

van Kooij, K. R. (1978): *Religion in Nepal.* Institute of Religious Iconography, State University of Groningen, Leiden, Brill.



図1　タン・バヒー寺本堂前景



図2　マンダラ台



図3　法界語自在マンダラ表面

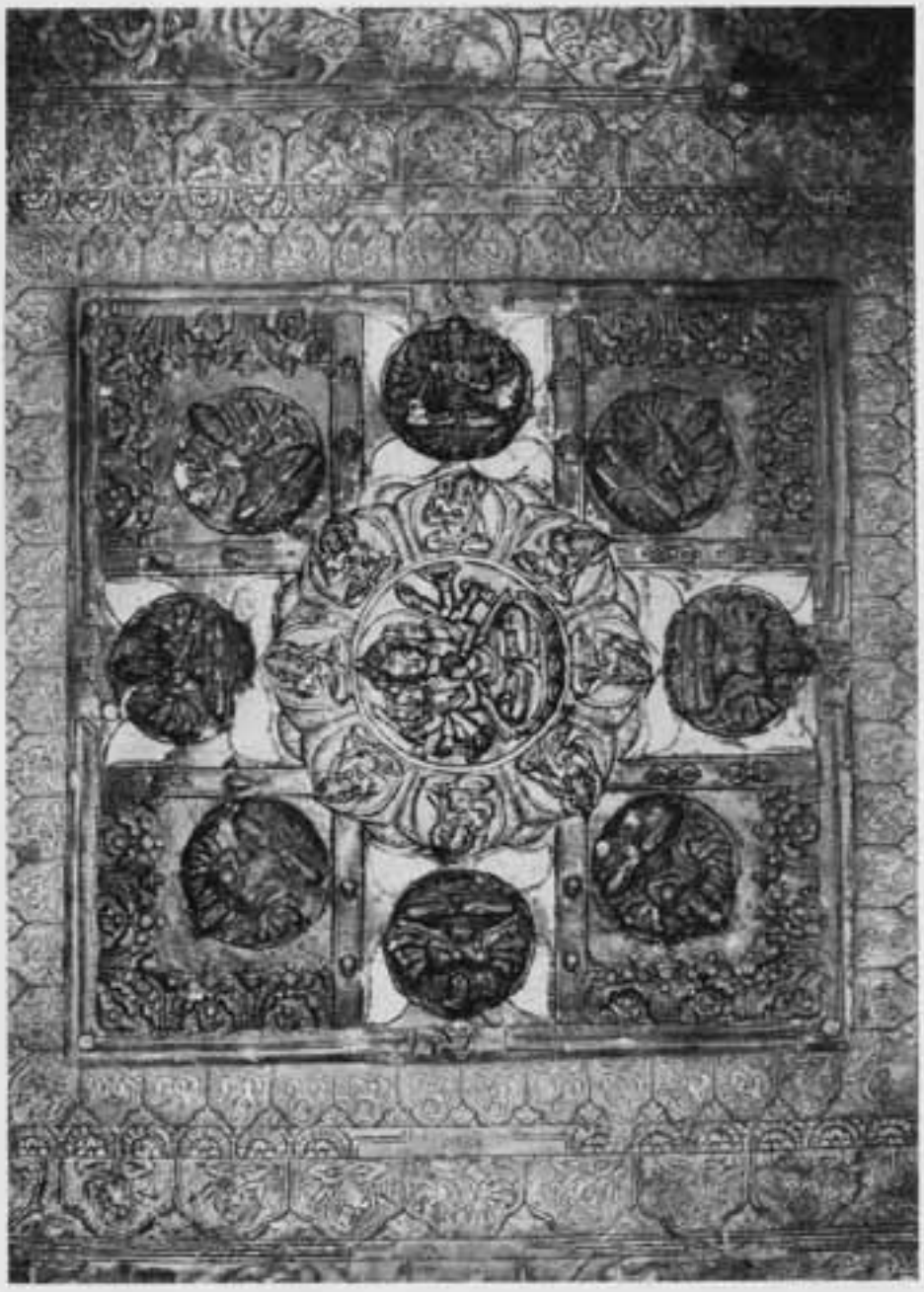


図4　第一重



図5　法界語自在文殊



図6　八仏頂の一尊（光聚仏頂）



図7　阿閦



図8　阿弥陀



図9　仏眼仏母



図10　白衣



図11　（上段）ウシュニーシャチャクラヴァルティン、（下段左より）地蔵、ヤマーンタカ、無盡意、（門）法無礙



図12　（上段左より）宝手、プラジュニャーンタカ、海慧、（中段）義無礙、（下段左より）忍辱、精進、禅定、般若、方便の各波羅蜜



図13　（上段）スンバラージャ、（下段左より）勢至、パドマーンタカ、月光



図14　（上段左より）井積、ヴィクナーンタカ、除憂闇、（中段）井無礙、
（下段左より）摩利支、業衣、常憶利、無量門、准提、智慧増長の各陀羅尼



図15　トライローキヤヴィジャヤ



図16　ヴァジュラジュヴァーラーナラールカ



図17　ヘールカヴァジュラ



図18　パラマーシュヴァ



図19　普賢



図20　無盡意



図21　地蔵



図22　虚空蔵



図23　燈女



図24　金剛触女



図25　第四重の神がみ



図26　第四重の神がみ

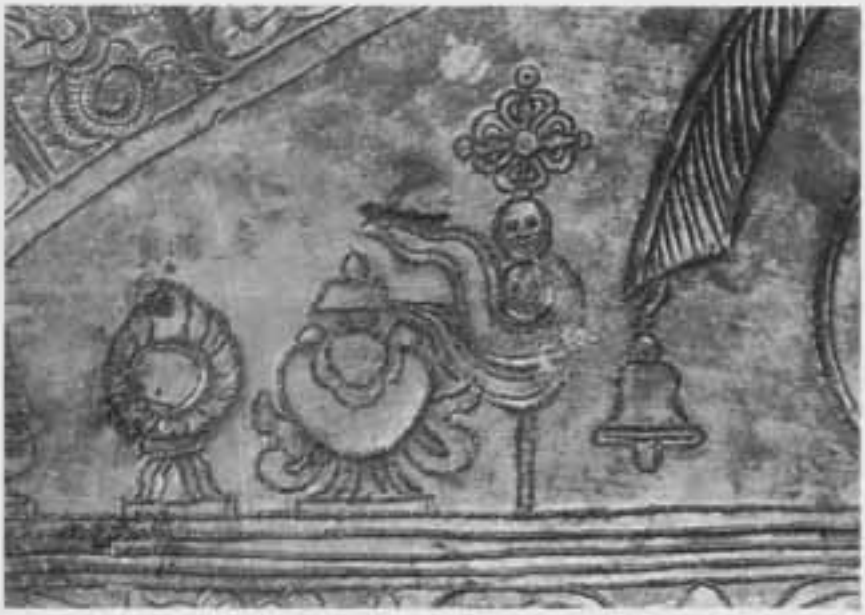


図27　楼閣の装飾



図28　マンダラ台基壇部

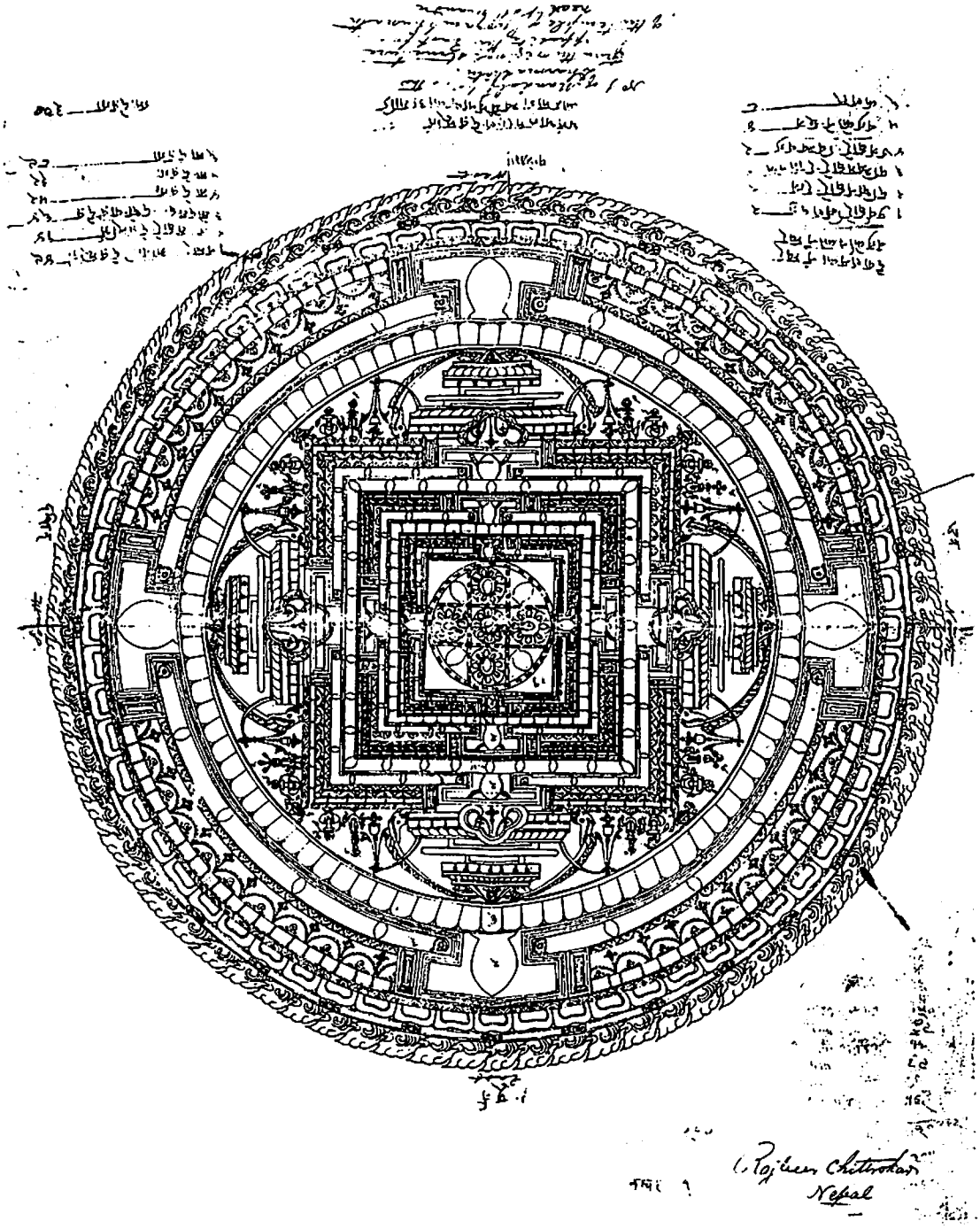


図29　インド省図書室所蔵マンダラ白描図（表）

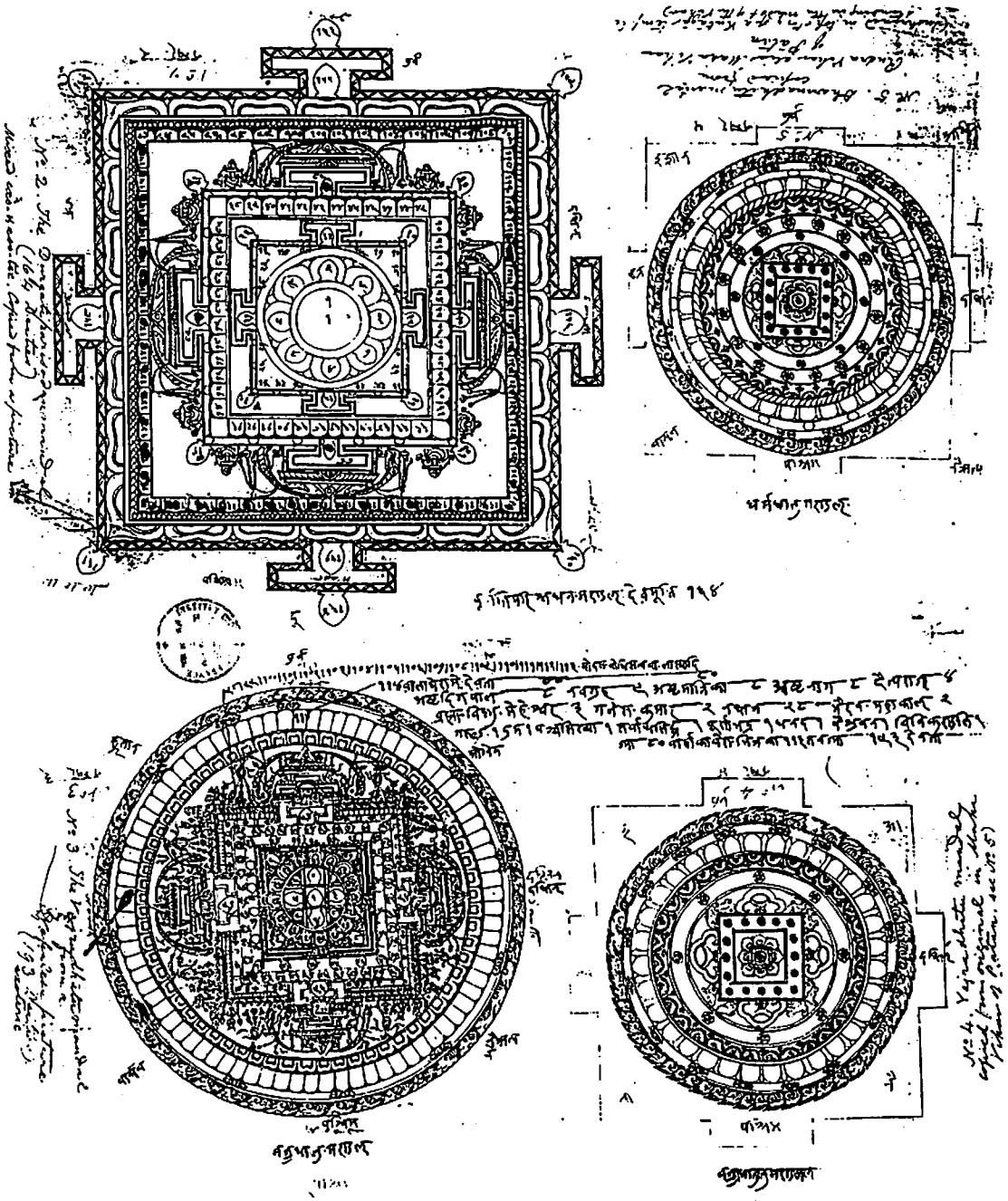


図30　インド省図書室所蔵マンダラ白描図（裏）



図1　タン・バヒー寺本堂前景



図2　マンダラ台



図3　法界語自在マンダラ表面

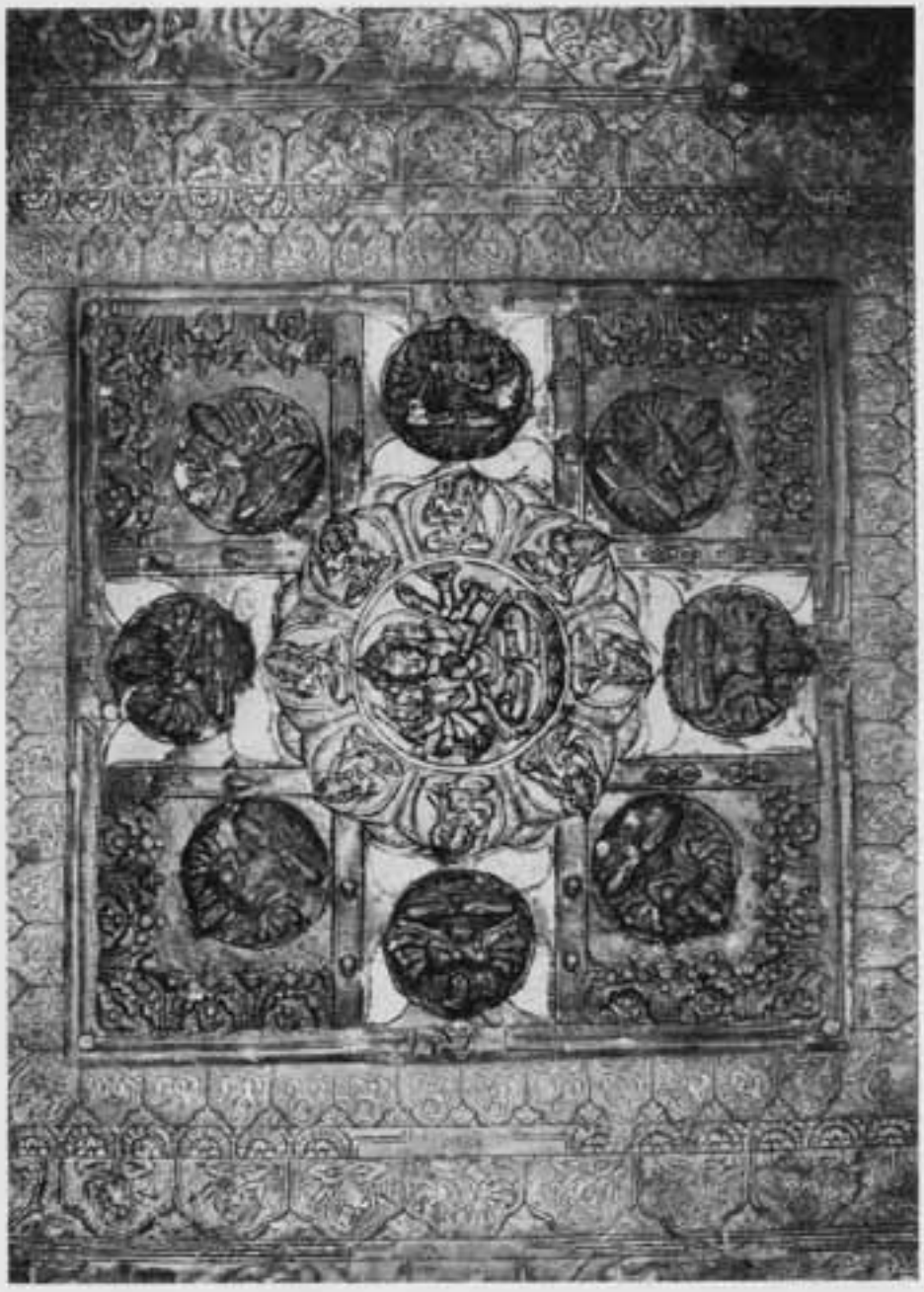


図4　第一重



図5　法界語自在文殊



図6　八仏頂の一尊（光聚仏頂）



図7　阿閦



図8　阿弥陀



図9　仏眼仏母



図10　白衣



図11　（上段）ウシュニーシャチャクラヴァルティン、（下段左より）地蔵、ヤマーンタカ、無盡意、（門）法無礙



図12　（上段左より）宝手、プラジュニャーンタカ、海慧、（中段）義無礙、（下段左より）忍辱、精進、禅定、般若、方便の各波羅蜜



図13　（上段）スンバラージャ、（下段左より）勢至、パドマーンタカ、月光



図14　（上段左より）井積、ヴィクナーンタカ、除憂闇、（中段）井無礙、
（下段左より）摩利支、業衣、常憶利、無量門、准提、智慧増長の各陀羅尼



図15　トライローキヤヴィジャヤ



図16　ヴァジュラジュヴァーラーナラールカ



図17　ヘールカヴァジュラ



図18　パラマーシュヴァ



図19　普賢



図20　無盡意



図21　地蔵



図22　虚空蔵



図23　燈女



図24　金剛触女



図25　第四重の神がみ



図26　第四重の神がみ

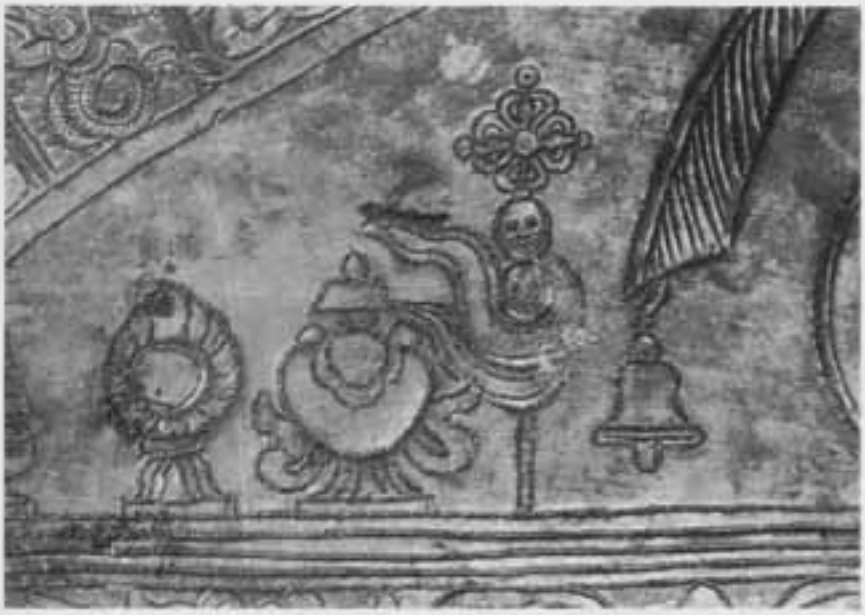


図27　楼閣の装飾



図28　マンダラ台基壇部

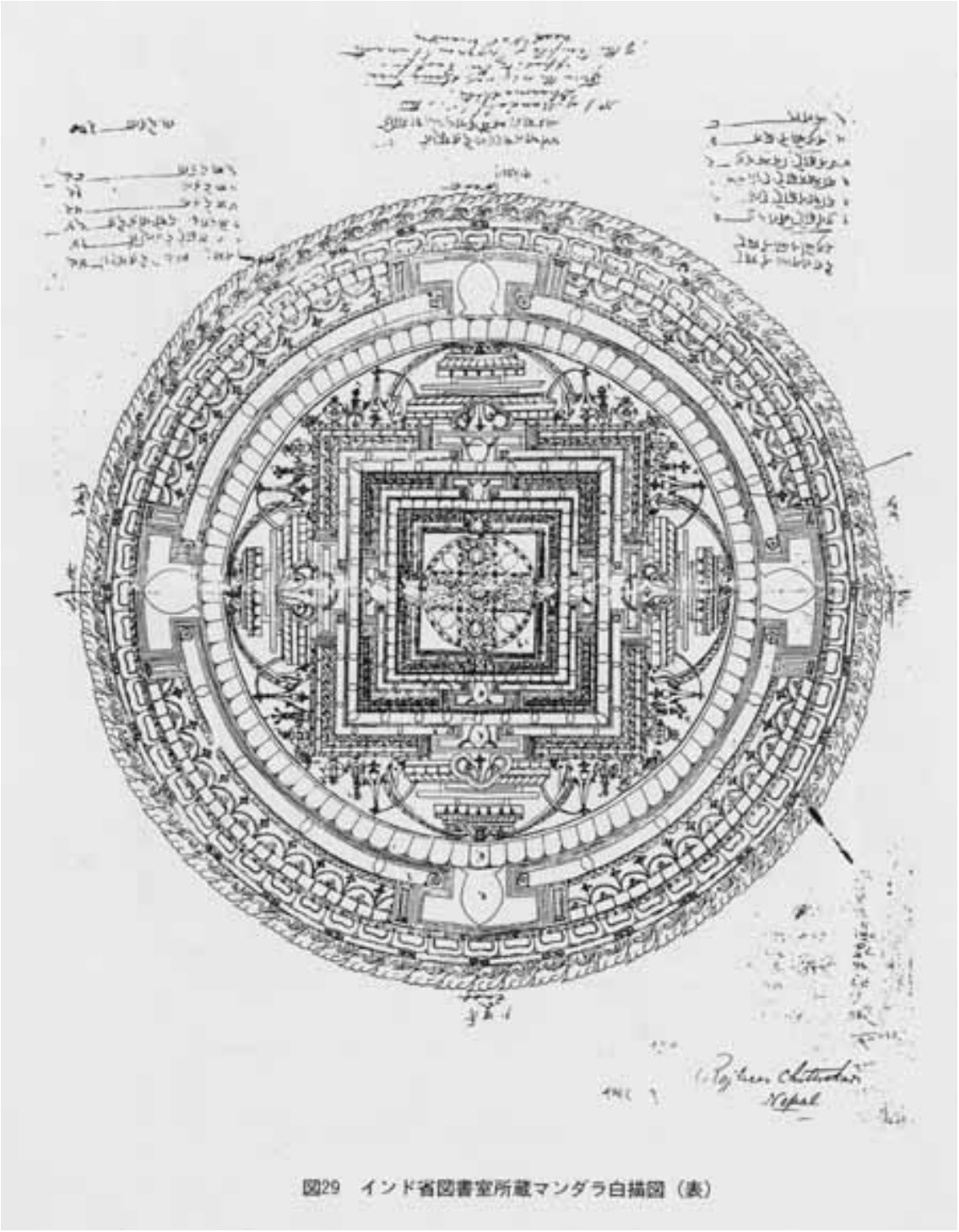


図29　インド省図書室所蔵マンダラ白描図（表）

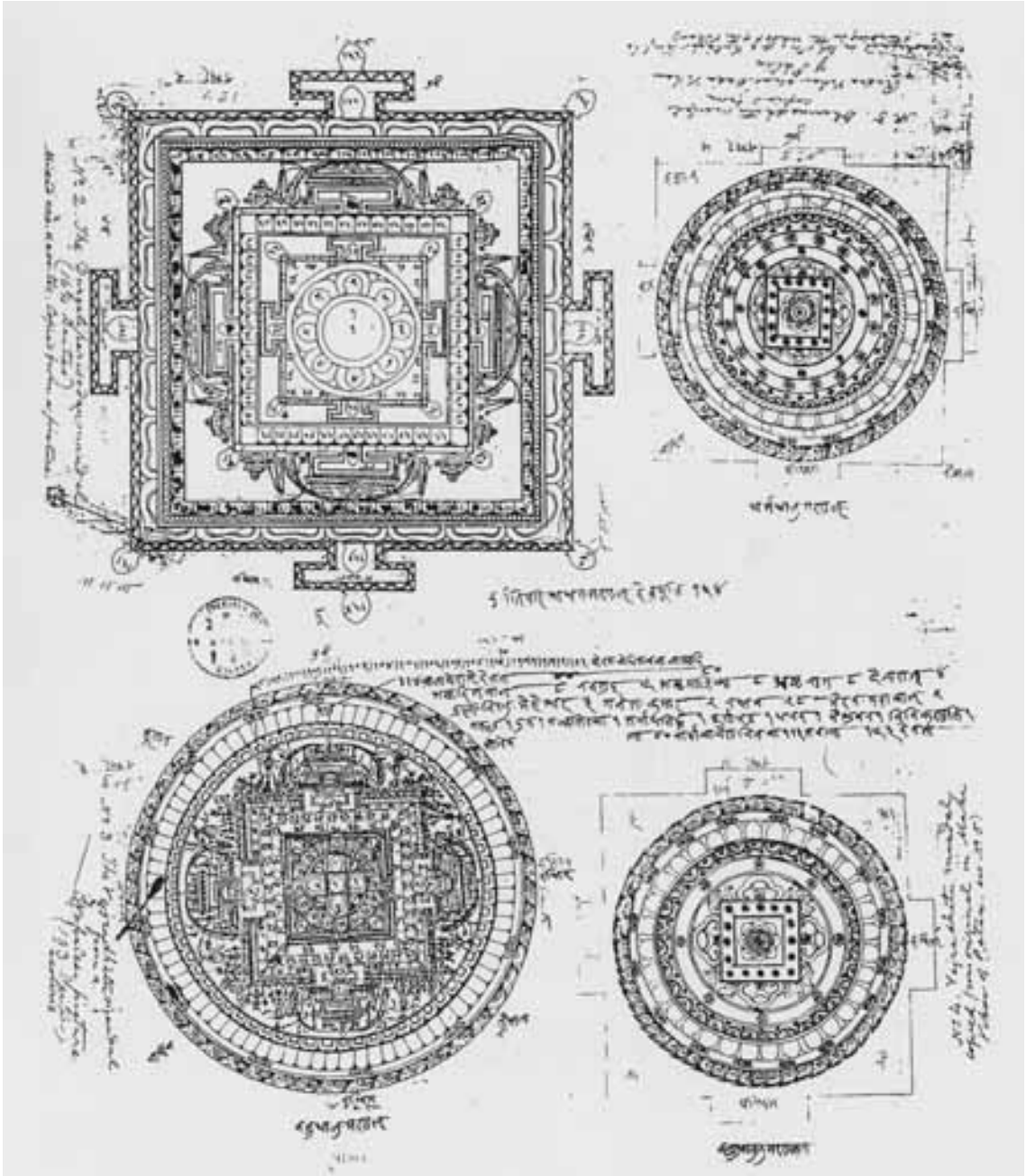


図30　インド省図書室所蔵マンダラ白描図（裏）